

拓く通信



「ALL JAPAN」で、福祉を。

— 戦争が終わって僕らは生まれた —

◆ 理事長メッセージ② 社会福祉法人拓く 理事長 馬場 篤子

団塊世代（昭和22～24）と昭和29年誕生の私（安倍総理も同年）は、戦争が終わって生まれた第1世と言えます。高度成長期に育ったせいか、楽天的で強気で何事にも立ち向かえる一方、どこか頭でっかちで自分本位。一方、私の子ども世代（30代後半～40代）の第2世は核家族化、消費文化の真っ只中で育ち、煩わしさを避けて主義主張はありません、穏やか、枠から突き抜けようとしない傾向が。そして、孫達の第3世になると危機管理が叫ばれる時代へ。近所づきあいが少なく、個人主義と個人情報保護によって、狭い人間関係の中で育つためか、引きこもりがちのように思います。

しかし、既に人口減少社会に突入、そして、災害多発。さらに、AIやロボットの進化により無くなる職業が増加という不透明な時代を迎え、戦後生まれの私達はたくましく生き抜くよう迫られています。その生きる姿勢やヒント

は、戦中・戦後と凄まじい時代を生き抜き、復興を支えてきた私の父母達（80代後半～90代）にありそうです。

ほんによかね会運営の地域食堂では、70代、80代の方々が作り手として活躍し、87歳の方が91歳と96歳の方を車に乗せて来店。3人共歩行が困難なのですが、近所同士のちょっとした支え合いで一人暮らしをされています。「90歳になっても、あのような生き方をしたい」。これが私の願いです。日本の社会保障制度の危機と言われるからこそ、このようにお互いに力を合わせ、知恵を出し、出会いを紡ぎ、生産文化を育てる、そんなプラットフォームづくりが急がれます。その中で、「拠点づくり」や「社会的活動」が地域でどんどん進んでいけば、より多くの人を支えていけるのではないでしょうか。これから日本の福祉は福祉事業者だけではなく、「ALL JAPAN」で担う。「拓く」は、その先頭に立って推進したいと思います。

（写真）3月2日両替公園にて開催。市内外の様々な世代、職業の女性が集合。「10年後の久留米市で、10万人の女性がつながる！」8頁に闇連掲載

◆ CONTENTS

●特集 「ALL JAPAN」で、福祉を。 我が事であること。今こそ、意識改革！	2・3
●特集 （一社）ほんによかね会 ファイト！ まちづくりの拠点として、次の一步へ。	4・5
●第17回ボレボレ祭りのご報告	6・7
●厚生労働省モデル事業は2年目へ	8



「我が事」であること。 私たちの意識改革！

少子高齢化、人口減少社会の今、

当法人は、社会福祉法人としてどう役割を果たすべきなのか、
自問し続けています。

認知症や精神疾患、癌、発達障がい…。

自分や家族の将来を考えると、他人事ではない、我が事ではないか。

誰もが担い手になって豊かな地域社会を創ることを目指し、

職員一人ひとりが意識改革に取り組んでいます。

誰もが 町の中へ



公共交通機関を
使ってのお出かけ

地域で生きるための力をつける、持ち続ける。

社会福祉法人拓く 統括本部長 北岡 さとみ

昨年1月、女児を出産しました。当時は、早めに職場復帰するものと思っていたが、保育園の入所ができず、結局1年間の育児休暇を取ることになりました。16年間働き続けた職場を離れ、自分が生死をさまようような出産を経験し、同時に家族が大病をしたことで、「人が生きていく」ことの大変さを考え始めた1年でした。また、赤ちゃんが1年間でぐんと成長していく姿を見ると、利用者の皆さんにとっての1年という時間の重さを考えずにはいられませんでした。

これまで利用者の集団生活を考えた時、安心安全や衛生管理などを優先し、安定した日常生活を送っていただこうと努めてきました。しかし、地域での生活には安定した日常は見当たらず、マニュアルも通用しません。だからこそ、日々、いろんな環境の中で

臨機応変に対応しながら、地域で生きるための力を身に付け、環境の変化に強くなること、互いに支え合うこと、そして、マニュアルではなく人としてつながるような取り組みが必要です。

障がい者は、決して「支援される人」というだけではなく、誰かの「生きる力」となり、「人を助けていく力」を持っています。そのために、今後もいろんな人とコラボしながらチャレンジし、さらに彼らの持てる力を生きる力に変えていきたいと思います。そして、一人ひとりが、人として信頼関係を築き、人との関係性の中で安心安全な環境を創ること。これは保護者、職員だけでできることではありません。日頃から、地域の中で混ざり合い、いろんな人と顔見知りになり、楽しみ、助け合えるような関係を作っていくたいと思いま



私たちの町で 当たり前に生きる

地域の一員として支え合う

出会いの場ポレポレ 管理者 小川 真太朗

私は29歳、拓くに就職して11年目です。朝倉市の実家は果樹園を営み、繁忙期は家族と知人で収穫を行い、その後はお茶を飲みながらお喋りするという光景が印象に残っています。2017年の7月、九州北部豪雨が発生し、実家も土砂崩れに襲われました。その時、祖父母と弟は家の中。山からのコロコロという音と一緒に家ごと土砂に飲み込まれました。幸い命は助かりました。避難所では、地域住民同士、知人らが互いを支え合ったことで、少しずつ生きていくエネルギーを蓄えることができたと思います。しかし、それは急に生まれたものでなく、日頃からつながっていたからこそ、「寄り添うこと」「お互いを支え合うこと」ができたのです。一方通行ではなく、双方が同じ空間、時間を過ごすことで初め

て相手の気持ちに立ち、次第に相手の心が分かるようになると改めて感じました。

今年度は、災害対策として、利用者の皆さんと職員の非常時への対応力向上のために、緊急時に備えて早帰りやグループホーム内に日中残って過ごす訓練を実施しました。しかし、災害時は施設支援者以外の方からのお力を借りる場合もあります。まさに日常的な混ざり合いがあることで、時間をかけて、ようやくそのような土壤が生まれていくのだと改めて感じています。

今年に入って、「ミニミニこども祭り」も実施。地域の子どもたちが来場し、一緒の空間で同じ時間を使って過ごすことで、少しずつですが、確実につながりつつあります。これからも、同じ地域で生きる仲間として役割を担い、

日中支援の現場から「当たり前」を問い合わせること

出会いの場ポレポレ 日中支援課 児玉 元気

私は32歳。法人に就職して10年です。福祉専門学校では、自ら車椅子を使って外出する体験などを通し、歩行が困難な方にとって車椅子は生活に欠かせない「移動手段」と学びました。そして、日中支援の現場に入っても、それは「当たり前」として支援していました。

昨年8月、当法人は利用者の皆さんを抱える際の職員の腰への負担を軽減しようと、「マッスルスーツ(福祉器具)」を導入。体に装着することで、動きをサポートしてくれる機器です。まさか、この出会いが、私の意識を大きく変えるとは思っていませんでした。

施設だけではなく、ご自宅等でもこれを活用できなかと、重度心身障害のある利用者Aさんのご自宅へ伺った時のことです。ところが、Aさんは「車椅子」ではなく、腕を使って這って、キッチンや廊下を自分の意思で行ったり来たり。何とも言えない喜びの表情でした。正直、大きな衝撃を受けました。「移動手段」という当たり前が、時として「拘束するもの」になりうると180度視点が変わりました。知らず知らずのうちに、介護

しやすいということで車椅子生活を強いていなかったか。今回、マッスルスーツ導入を通して、改めて、「当たり前」を問い合わせることの大切さに気付きました。

マッスルスーツなどの福祉器具の開発がさらに進めば、高齢者自身が家族の介護をもっと楽にできるかもしれません。そして、障がいのある方が、どんな場所にも、どんな交通機関を使っても、出かけることができるようになつたら、誰もがどんな状態になつても、好きな場所に出かけることができるようになるでしょう。今後も「当たり前」を問い合わせながら考え、日々、実践していきたいと思います。



「ALL JAPAN」で、福祉を。



特集 (一社)ほんによかね ファイト!

開所から約1年、農産物直売所「そらまめ」。 まちづくりの拠点として、次の一步へ。

2017年11月、「ほんによかね会」は、一般社団法人として歩み始めました。

約1年の活動を経て、課題は山積。

しかし、農産物直売所「そらまめ」には、住民のあふれんばかりの笑顔、いたわり合う言葉。まちづくりの拠点として、そんな温かい空気感のある場所に育っています。

寄稿

この町に、子どもたちに、希望の光を—。

一般社団法人 ほんによかね会 代表理事 緒方 麻美

今春で、ほんによかね会の運営会議は26回を数えました。年齢も経験もさまざまな安武町の住民で構成され、良い意味でそれぞれの熱い想いや本音をぶつけ合う貴重な機会になっています。大切にしているのは、この「多様性」を会の強みとして活かすこと。仲間の違いを認め合い、汗をかきながら試行錯誤を繰り返す。そうするといろいろな人が主体となって活動する。それがつながって循環していくれば、また新たに活躍する人たちが生まれる。おぼろげながらそのような姿が見えてきたように感じます。

現在、地域食堂も農産物直売所も皆さんの笑顔で支えられているものの、調理ボランティア不足、直売所の品揃え不足、客数の伸び悩みなど課題は山積。しかし、人口が減りつづけている安武町。いつしか消滅するかもしれません。空き家は増え続け、農業の後継者不足も深刻、

子育て中の多忙な親たちは核家族で孤立しています。

私自身は50代、2人の子どもを持つ母親です。この町や子どもたちの未来に希望の光をもたらしたいと心から願っています。今日まで活動を続けていくうちに、今こそ、誰もがこの地域でつながるチャンスだと考えるようになりました。それには保護者世代の意識変革が必要。「個」で生活の全てが賄えるのであれば(かつて私自身もそうでした)、ご近所づきあいは面倒以外の何物でもありません。しかしながら子育ては別。発達段階において養育者や教職員以外にどれだけの大人と関わりを持つかによって、将来に希望をもたらすのです。暮らしやすい町、子育てしやすい町にするにはどうすべきか。会の活動を通して、この町のために子どもたちのために、今、やるべきことをしっかりと実践したいと思います。



笑い合い、ぶつかり合い! 住民の皆さん、奮闘中です

J Aくるめ安武農産物直売所 リニューアル・オープン!

安武コミュニティセンターや憩いの家、小学校、保育園がそばで、老若男女が集うエリアにある安武農産物直売所「そらまめ」。キッチン完備で、体が不自由でも使えるトイレに改修し、誰でも集えるよう拠点を作りました。

12月の新装開店の式典では、大勢の住民の方々に新しい門出をお祝いしていただきました。



農産物直売所「そらまめ」 元気に営業中!

住民の方々が心を込めて育てた野菜の販売と、生活に必要な青果、肉、魚、牛乳などを販売しています。5月には「そらまめ祭り」、12月末には「暮れの市」などを企画し、地域外の方も大勢来場されました。

これまで安武町で野菜を育てても家庭だけで消費していましたが、直売所に並べると多くの人が喜んで買ってきます。「地産地笑」の拠点になれるように、これからも頑張っていきます。



地域食堂 心の栄養も満点!

栄養満点、ボリューム満点の食事を1日約50食、会員300円(非会員500円)で提供しています。現在、8つのボランティアチームで運営。

住民の方々が食堂に来ると、「ここにちは」「最近見なかったね」「そういえば、こんなことがあったわよ」など自然と会話が生まれ、おいしいご飯がもっとおいしくなります。作り手のボランティアさんも、「ありがとう」「おいしかったよ」の言葉で、心の栄養も満点。回数を重ねる毎に、味も彩りも盛り付けも上達していると評判です。



住民による移動支援 「安武あいあい交通」稼働中!

「足が弱ったから、外出できない」ではなく、弱くなってしまっても、買物や「地域食堂」に行けるように、無料タクシー送迎を実施中です。

2018年12月より安武校区コミュニティセンターで事務を開始、「コミュニティタクシー」が始まり、「安武あいあい交通」と2方向で交通弱者の移動を支えています。



拓くは、ほんによかね会の社員です。

障がいの有無や世代に関係なく、福祉サービスだけに頼ることなく、どうしたら安武町で安心して暮らしていくのか。その環境づくりを地域の皆さんと一緒に考え、力を合わせてやっていきたいと思います。

「ALL JAPAN」で、福祉を。

アフリカ
チーム



11月、第17回ポレポレ祭りを開催しました。 つながった!コラボした!「絆」が生まれた!

2018年11月4日、「第17回ポレポレ祭り」を開催し、約5,000人の来場者で賑わいました。

各会場では30団体500名を超えるボランティアの方々と共に、恒例のバザー、ガレージセール、新企画「ケニアフェア」などを実施。

祭りを通して、様々な絆や商品が生まれました。

「ポレポレ(ゆっくり)」はケニアの言葉

東京オリパラ ケニアの事前キャンプ地に決定! 久留米市をさらに盛り上げたい!

第17回ポレポレ祭り実行委員会 実行委員長 山下 剛

今回のテーマは、「つながって、コラボして、何かが生まれる!」でした。久留米市が2020年東京オリンピック・パラリンピックの参加国、ケニア共和国の事前キャンプ地に決定したことから、ポレポレ祭りで久留米市を盛り上げていきたいと考え「ケニアフェア」を実施。市内在住のアフリカの方とつながり、アフリカ料理「サモサ」の商品開発、販売を行いました。また、安武町在住のベトナム農業実習生の方ともつながり、「本場春巻き 手羽から揚げ」も創作。生まれたのは商品だけではありません。国や育った環境が異なる方々とコラボ(共同)することで、お互いの文化や経験などを身近に感じる機会となり、言葉では表現できない「何か」が生まれたように強く感じています。

40代の私自身は、人付き合いが得意な方ではなく、あ



本場春巻き
手羽から揚げ

まり地域や他人に関わることなく生活していました。核家族化が進み、隣近所に誰が住んでいるか分からない時代と言われても、特に何か問題があると思っていませんでした。ですから、テーマが決定しても最初はあまり乗り切れなかったのですが、実行委員長として4月頃から準備を始め、11月の当日までの間、様々な方々とあえてつながるうちに、少しずつ考え方方が変わってきました。そこには、人と出会い、一緒に何かを行うことを「楽しめる」自分がいたのです。つながり、コラボして生まれるのは商品だけではなく、今の日本の忘れかけている「絆」だと気付きました。

今回の祭りは終了しましたが、「つながって、コラボして、何かが生まれる!」を大事にして、わが街久留米市をさらに盛り上げていきたいと思います。

ポレポレ祭り × ケニアフェア たくさんの仲間たち!

今回の祭りに参画してくださった大勢の皆様、
有難うございます！
2名の方よりメッセージをいただきました。

寄稿 ポレポレとは、誰にでも開かれたコミュニティ。

ローローズカフェ経営者 カチガンバ ローレンス

今回、ポレポレ祭りに参加し、準備の中でアイデアを出したり、ケニア料理を教えてたりすることで皆さんと大きなつながりを感じることができました。サモサやシチュー、ケニアのテントづくりを通して、アフリカのことを久留米の人たちに知ってもらうことができ、嬉しかったです。また、自分の意識も大きく変わり、いろいろなイベントや社会的活動を積極的にしていくようになりました。

新しい人たちと出会い、新しい友達をたくさん作ること



ローレンスさん(右) アフリカ マラウイ人
小学校の英語の教師 来日18年目

ができるポレポレとは、「誰にでも開かれたコミュニティ」であると分かりました。たくさんの縛、人と人とのつながりが生まれるこのような祭りは、今、社会にある様々な差別や社会問題の解決に向けての第一歩になると思います。

次回も祭りに参加して、もっとたくさんの外国の友達を呼び、この急成長中のコミュニティの一員になってもらいたいと思っています。

寄稿 祭りを通して、かけがえのない出会い。仲間は身近に大勢いる。

サモサ作るっ隊 篠島 敏文

48年前の1970年（昭和45年）、僕らは生まれた。

小中学校で共に学び、共に遊び、高校進学と同時にそれぞれの道へ。あれから約30年、私も高校卒業を機に地元を離れて北九州で就職、仕事や家庭に集中するあまり地元の友達とは疎遠になっていました。

ポレポレ祭りへの参加は、20数年ぶりの同窓会がきっかけでした。同級生メンバーでしかできない「何か」を仕掛けてほしいと提案されたものの、地元に根付いて活躍している人、県外で頑張っている人など環境が違う上に、生活パターンの制約もあって、やれるのか疑心暗鬼。でも私自身、心のどこかでは仕事や趣味ではなく、家族や友達行事でもない完全なボランティアに対しての好奇心と、それ以上に祭りをネタに同級生である

「仲間」と一緒につながって、物事を達成する感覚を久々に味わいたかったのです。

祭りに向けては、「ローローズカフェ」のローレンスさんから「サモサ」を学び、時には「拓く」の職員の方と一緒に粉まみれになりながら幾度も試作。苦労した場面の全てがたくさんの人とのかけがえのない出会いにつながり、自身の財産となったことは否めません。

人間関係が希薄な現在、私たちはいろいろなしがらみの中で懸命に生きようとしています。そんな自分の心境を聞き入れ助言してくれる人が、身近にこんなにも大勢いることを再認識できたことからも、祭りに参加した意義は大いにあったと実感しています。

ポレポレ祭りって？

2002年秋より、「祭りを通して、地域の皆さんとつながる」という願いでスタート。法人職員を始め保護者会やポレポレ俱楽部（後援会）、地域の保育園、小中学校、商工会などで構成する実行委員会を中心に企画運営。

第17回ポレポレ祭り 収支決算

収入の部			
項目	金額	項目	金額
広告・協賛	2,345,000	こども広場	70,400
バザー売上	1,322,480	学校交流売上	35,900
東北売上	226,110	手作り作品・メンバー材料費	52,900
熊本売上	22,000	その他（貢取・食費）	6500
朝倉売上	124,350	御祝	66,000
ケニア売上	251,400	利息	27
ガレージ売上	402,805	収入合計 ①	4,925,872

支出の部			
項目	金額	項目	金額
通信・印刷・パンフレット代	290,115	手作り作品・メンバー材料費	32,160
バザー材料費	967,252	ステージ設備費	321,722
東北仕入費	178,688	警備費	210,600
熊本仕入費	22,000	ボランティア費（食費、打上、お礼）	303,252
朝倉仕入費	140,000	消耗品・雑費等費用	439,852
ケニア仕入費	292,742	金券使用分（広告協賛お礼配布分）	237,130
こども広場材料代	43,401	支出合計 ②	3,491,830
学校交流材料費	12,916	収支差額 ①-②	1,434,042

「ALL JAPAN」で、福祉を。



厚生労働省モデル事業は2年目へ 地域に希望を創る！プラットフォームづくり

社会福祉法人拓く 本部長 浦川 直人

私は、障害者自立支援法の施行（2008年）と同時に入職。これまで、障害福祉サービスは内容を変化させながら拡大していましたが、今後は人口バランスが崩れ、担い手が少なくなり、経済も縮小することから、これまでの考え方が通用しない時代へ突入。その変化にどう対応するか、大きく思考を変えなければならない時代が目の前にきています。

そんな中、国のモデル事業は2年目。1年目を実践して、人口減少社会では、障がいの有無や老若男女に関わらず、「誰もが地域の未来を創る担い手であること」。そして、「若い世代こそ手触り感のあるつながりを求めている」ことが分かりました。そこで、2年目は若い世代を中心の事務局となり、70名を超える人たちがコンソーシアム（共同事業体）を結成し、新たに6つのプロジェクトを実践。そこでは、異文化・多世代、多分野の団体や人々が新たに出会い、つながり、多様なコミュニティを生み出しています。

そういうコミュニティが次々と生まれてくるような地域の土壤（プラットフォーム）づくりが、今まさに必要です。当法人も、視野を広げ、多様な団体や人々とつながることで、障がいがあっても希望を持って働き、地域で暮らしていく環境を創っていく。そして、プラットフォームづくりを担う一員として、多様な人が出会う場づくりのためにオーガナイズする力など、職員が新たな力を身につける研修会を積み重ねながら、誰でも「混ざり合い、共に生きる」ことの実現を進めていきたいと考えています。

国のモデル事業って？

厚生労働省「保健福祉分野における民間活力を活用した社会的事業の開発・普及のための環境整備事業」のこと。当法人は、2018年度・2019年度の2年連続で、少子高齢化、人口減少社会にどう向き合うか、真剣に社会保障のあり方を研究するためにモデル事業を受託。共通の目標に向かって、企業や団体、行政等、様々な分野や領域を越えた立場の人々が集まつた「コンソーシアム（共同事業体）」で議論をしながら一緒に地域を創っています。



WeLab46 久留米10万人女子会

市のモデル事業2年目プロジェクトの1つ
市内46校区で定期的に女性たちが集う「ラボ会」を開催。
「私のことは私たちのこと」として、
女性たちが地域に目を向け始める変化が起きている。



コンソーシアム

2年目は拡大し、事務局11名、行政関係者16名、
プロジェクトメンバー40名。
福祉系とまちづくり系の出会いなどが次々に生まれている。



ほんによかね会 農産物直売所・地域食堂

安武住民による同会は1年目のプロジェクト、現在も活動中。
若いお母さんと子どもがご近所さんと知り合う場にも。
(詳細は4・5頁参照)

活動を更新中!

社会福祉法人拓く

1970年代より久留米市で展開した障がい児の保護者と教員による統合教育運動が原点。2000年10月
法人設立。障がいが重くても誰もが地域で暮らすために「コミュニティづくり」に取り組んでいます。

ウェブサイト

事業所 出会いの場ポレポレ・夢工房・FOODS CAFE YUME・惣菜処ばればれ・グループホーム5ヶ所

社会福祉法人拓く

検索